

論文概要

仇兆鰲『杜詩詳註』の研究

佐藤浩一

【概要】

一 本研究の目的

本論文「仇兆鰲『杜詩詳註』の研究」は、清の仇兆鰲（一六三八—一七一七）が半生をかけて著した杜甫の注釈書『杜詩詳註』に関して、幾つかの観点に即して考察したものである。仇兆鰲『杜詩詳註』は、同じく清の王琦による注釈書『李太白文集』と並んで、杜甫・李白を研究する上での最も基本的な文献であり、本書を用いぬ日中の古典研究者は存在しないとさえ言ってよいであろう。しかし、それだけの通行性と重要性に比して、本書に関する実証的かつ系統的な研究は、従来ほとんど行われてこなかった。本稿は、このような研究上の空白を埋め、総合的に関連づけてゆくことで、杜甫研究に新たな礎石を据えることを目的とする。

二 本稿の構成

本稿は大きく分けて、「本編」と「資料編」から構成されている。「本編」は、【序論】【言語論】【伝本論】【文化論】【結論】の五部構成となっている。「資料編」は、「本編」の立論上の根拠となっている調査データを一括して掲載したものであり、「音注リスト」「抄本・排印本収録作品排列対照表」「版本リスト」を収めている。

以下の構成を詳しく示すと、次のとおりとなっている。

【序論】

- 一 問題の所在
- 二 先行研究
- 三 仇兆鰲に関する史料
- 四 仇兆鰲の略歴

【言語論】

第一節 一万を超す音注が意味するもの

一 問題の所在

二 特色としての一一〇三五箇所の音注

(1) 四三六〇箇所の音注——文字媒体

(2) 六六七五箇所の圈発——記号媒体

(3) 他テキストにおける圈発

三 音注執筆者の特定——仇兆鰲か、友人の金埴か

(1) 金埴による音注の校訂

(2) 四三六〇箇所の音注——文字媒体

(3) 六六七五箇所の圈発——記号媒体

四 仇兆鰲の学問——音注執筆の要因(一)

(1) 誦習による執筆

(2) 考証学としての古音研究

(3) 「知人論世」の一環として

五 読者への配慮——音注執筆の要因(二)

(1) 重複ゆえの大量化

(2) 『杜詩詳註』特有の圈発

六 康熙帝への進呈——音注執筆の要因(三)

(1) 典麗な風格としての圈発

(2) 康熙帝の知遇

七 結語

第二節 破音の検討

一 問題の所在

二 先行研究

(1) 数多い破音の分析

(2) 散見する中古音理解の不正確

(3) 近体律の平仄を優先させる仇氏の注釈態度

三 破音の個別的な検討

復——音義資料の系譜に列する『杜詩詳註』

朝——音注の有無に拠る「初音と破音」の識別

思使論騎行去上下——現代における旧読の対処

始也——有職読み

相結——音注の集大成たる価値および問題点

第三節 叶音の検討

一 問題の所在

二 杜甫は叶音を用いたか

三 仇兆鰲における叶音多用の背景

(1) 朱熹の影響

(2) 音声優先の注釈態度

四 杜文における叶音の可能性

【補説】杜甫が父母の死を悼むさいに消える文飾の意識

第四節 方音の検討

- 一 問題の所在
- 二 先行研究
- 三 先行研究の修正と補足
- 四 結語

【伝本論】

第一節 抄本——康熙三十二年抄本をめぐって

- 一 問題の所在
- 二 抄本に関する基礎的事項

- (1) 成書経緯
- (2) 体裁
- (3) 抄本に無い作品
- (4) 所蔵

三 抄本の書誌学的価値

- (1) 孤本
- (2) 文字の異同を見極める判断基準として
- (3) 刻本の刊行順の手がかりとして
- (4) 音韻史料の区別
- (5) 御覽に相応しくするための圈発
- (6) 精確な日付け

【資料】 潘家の相関図

第二節 刻本——刊行順序の整理

一 問題の所在

二 初刻本

三 康熙五十二年刻本

四 康熙五十二年以降の後印本と翻刻本

(1) 康熙後印本系統

(2) 翻刻本A系統

(3) 翻刻本B系統

(4) 翻刻本C系統——石印本

五 判別方法

六 展望

七 音注

【資料】刻本の流通・刻本所蔵リスト

第三節 排印本——その点校者と編纂背景

一 問題の所在

二 中華書局編集員による点校

三 『杜詩詳註』排印本化の理由

四 補訂作業

五 点校者の略歴

【文化論】

第一節 『杜詩詳註』における「論世知人」——浙東^{ぎん}鄞県という文化的磁場

一 問題の所在

二 進呈の契機とその問題点
三 鄭県という磁場

(1) 王嗣奭(一五六六～一六四八)——先輩
(2) 黄宗羲(一六一〇～一六九五)——師匠
(3) 萬斯同(一六三八～一七〇二)——友人
四 顕在する意識——論世知人

(1) 序文と進書表から
(2) 「論世知人」という尊経復古
(3) 詩を以て史を補う

五 潜在する意識——尚友

(1) 進呈の意味
(2) 尚ぶべき友

六 結語

第二節 仇兆鰲の『孟子』観

一 問題の所在

二 孟子の使用例とその特徴

三 民本思想——黄宗羲との関わり

四 「老杜は孟子に似る」——宋代の評から

五 黄宗羲からの師承

六 「惓惓たる忠愛の誠」——君と民へのまごころ

七 結語

【結論】

以上の構成となっている。次に、各論の内容について、その要点を述べたい。

三 序論について

序論では、先行研究の整理を行い、『杜詩詳註』および撰者仇兆鰲に関して、どこまで言及されて、どこからが不明なままであるかを整理した。その結果、

- ①『杜詩詳註』には特色と言うべき膨大な音注が含まれているという点、
- ②『杜詩詳註』には抄本・刻本・排印本の3種類の伝本が存在しているのに、いかにして編纂されたのか、いかにして流通していたのか等々、書誌学的な把握がほとんど行われていない点、
- ③そもそもなぜ仇兆鰲は『杜詩詳註』を書いたのか、

以上の問題点が、十分に議論されぬままであるか、ないしは不明なままであることを明らかにした。その上で、①については【言語論】、②については【伝本論】、③については【文化論】にそれぞれ対応させて考察を進めることとした。

序論ではさらに、仇兆鰲の略歴を示し、より深い理解を図れるようにした。

四 言語論について

言語論は、「二万を超す音注が意味するもの」「破音の検討」「叶音の検討」「方音の検討」の以上四章から構成されている。杜甫のテキストは宋代より多く作られ始め、宋仁宗嘉祐四年（一〇五九）の王洙・王琪『杜工部集』をはじめ、寧宗嘉定一五年（一二三二）の黄希・黄鹤による『千家集註杜工部詩史』、理宗紹定四年（一二三二）の『集千家註分類杜工部詩』など、それこそ「一〇〇〇家」もの文人たちによ

つて、杜甫の詩文は注釈されていた。こうしたあまたの注釈者たちの成果を承けて、康熙三二（一六九三）年に生まれたのが『杜詩詳註』であった。「二〇〇〇家」も注釈者たちがいれば、ややもすると注釈者間の特性も見極め難くなりそうな中であつて、仇兆鰲『杜詩詳註』は該書ならではの特性が、他テキストに埋没せずに存在している。すなわち、大量に記された音注である。杜甫詩句に関する詳細な解釈や考証だけで言うならば、『杜詩詳註』以外にも『杜臆』や『讀杜心解』など多くの優れたテキストが存在するわけであるが、これら杜甫テキストと比しても顕らかに独り『杜詩詳註』だけがきわだつて多く音注を包含しており、その数は、実に一万箇所以上にもわたつて記されているのである。これだけの規模をほこる音注は、『杜詩詳註』の他には一切存在せず、まさに該書の特徴だと言えよう。

（1）一万を超す音注が意味するもの

まず第一節「一万を超す音注が意味するもの」においては、『杜詩詳註』には2種類の音注が含まれていることを明らかにした。例えば、「数、音朔（「数」は朔を音とす）・「数、去声（数は去声なり）」・「数、所角切（数は所角の切なり）」と言う具合に、直音・四声・反切によつて発音が示されており、そのほとんどが破音（発音による読み分け）を示す音注となっている。このような文字媒体による音注が四三六〇箇所までに及んだ。これだけでも未曾有の数量であるのだが、さらに『杜詩詳註』には、「圈発」という記号媒体による音注が、六六七五箇所も内在している事実を発見した。圈発とは、文字の四隅に圈点を附けて、その圈点の位置によつて声調を示す音注である（左下〓平声、左上〓上声、右上〓去声、右下〓入声）。このような文字媒体による音注（四三六〇箇所）と、記号媒体による音注（六六七五箇所）を合計すると、実に一一〇三五箇所にまで達することを、本研究では明らかにし得た。とりわけ主要な古籍を調査した結果、圈発を含む詩集はほとんど存在しないことが判明した。まさにこの意味において、一万を超え、しかも稀少な圈発を含む音注こそは、『杜詩詳註』ならではの特色たることを、本稿は指摘した。

第二に、この一万を超す音注が、仇兆鰲自身に拠つて記されていた点。すなわちこの音注は、音韻を専門とする校訂者によつて記された可能性も含んでいたのだが、調査の結果、仇兆鰲その人の手によつて記されていたことが判明した。仇兆鰲は音韻を家学とする読書人家庭に育っており、これほどの音注を表せるだけの音韻知識を、そもそも有していたのである。この意味においても音注とは、仇兆鰲の面目躍

如たる注釈であつたことを、本稿は指摘した。

第三に、なぜ一万を超える音注が附されたのかという点。これら『杜詩詳註』の音注の中核を成しているのは、四声別義に基づく、初音と破音の識別であり、すなわち意味と発音上の「読み分け」である。それはいわば、隋唐的（中古的）古典学の体系を正確に復元し、その正しい響きに従って杜甫を解釈・鑑賞したい、という強い熱意に支えられた注釈となっている。本稿ではこの熱意とは、『杜詩詳註』序文で謳われてた「論世知人」との関わりによって催されていると指摘した。すなわち「論世知人」とは、孟子を典故とする詩学であり、「古への人を友としてたつとび、その詩を読もうとするとき、その人自身を理解せずして理解は深まらない。だからその人が生きていた時代を論ずる必要がある」という説理である。孟子はそれを「尚友（古への人を尚び友とすること）」だと結論する。実はこの「尚友」こそは、仇兆鰲の号に他ならず、たとえば仇兆鰲の自訂年譜を『尚友堂年譜』という。してみれば、「尚友」と直接の因果関係にある「知人論世」は、尚友を名乗る仇兆鰲の哲学と、直接に関連した詩論であることが判ろう。

この尚友こと仇兆鰲にとって、尚ぶべき友こそは杜甫だったのであり、それゆえ『杜詩詳註』を執筆したのでだろう。そのさい、杜甫への理解を深めるため、杜甫が生きた時代を丹念に考証して論じる必要があつたのだらう。まさにこの段階において、杜甫が生きた時代の杜甫の発音を論じようとした音注こそは、「知人論世」の一環として詳述されるべき注釈であつたのだらう。

（2）破音の検討

ついで第二節「破音の検討」においては、音注の大半を占める破音に関して、具体的な音注例に即して検討を行った。まず先行研究において、どこまで明らかにされているのかを整理した。今日、最も系統のかつ網羅的な研究成果と言えるのが、陳若愚氏による「仇兆鰲《杜詩詳註》音釈評議」〔『西南民族学院』哲学社会科学版、一九九八年〕であり、同氏が提示する破音例を列挙した。この陳若愚氏の論考において特に参考に値するのが、仇兆鰲における「中古音理解の不正確」である。発音とは、時代と地域によって変化するものなのであるが、仇兆鰲が現代音の知識によって、杜甫が用いていた中古音を理解しようとしていた。また仇兆鰲は、己れの出身地寧波の発音によって、長安

人である杜甫の発音を理解しようとしていた。こうした中古音理解の不正確が、『杜詩詳註』においては散見され、陳若愚氏はそれを指摘しており、大きな学問的貢献を果たしている。ただし陳氏の指摘には、すでに日本の水谷誠氏が十年前より発言している指摘も含んでおり、こうした学術情報の伝達が不徹底である点は遺憾と言わざるを得ず、今後の音注研究にとって、克服すべき課題の一つになったと言えよう。

本稿ではさらに、先行研究にて充分に言及され尽くしていない破音の音注についても、個別的な検討を行った。

たとえば「朝」字を例にして、仇兆鰲が音注を附けるルールを明らかにした。すなわち、原則として破音（派生音）に音注を附しており、換言するならば、逆に音注を附けていないと、その字が初音（基本音）の使用例だと受け取られてしまうので、誤解を避けるためにも、一貫して破音には音注を附けていることが判明した。もともと例外もあり、

「羣雄競起問前朝音潮、王者無外見今朝音昭」

という如く、「朝」の初音・破音の両方に音注が附いたケースも存在する。しかしながら、圈発についても破音にしか附けられておらず、右の「朝」字についても、初音には圈発が無く、やはり仇兆鰲が音注を附ける原則は、あくまで破音にあることを、本稿は指摘した。

また、「思使論騎行去上下」の各字を例にして、現代における旧読の対処について考察した。すなわち仇兆鰲が右の各字に附けた破音は、中古的発音として附けられている。ではそれら中古的発音は、現代に於いてどこまで従うべき拘束力を有しているのだろうか。本稿では、発音の変化した今日では拘束力は無化しているようが、敢えて旧読に従うことによつて、古典的な音感を享受することは出来る、という今日的用途を指摘した。

また「始、去声」「也、音夜」を例に、いわゆる有職読みゆうしやく（読み癖）の音注が散見することも指摘した。管見の限りでは、右の注釈通りに発音すべきとする音韻的根拠は見いだせず、辿りうるのは宋代文人たちによる読み癖である。実際、仇兆鰲が引用するのも宋代文人の発言だけであり、その発言を裏付ける音韻資料は引用されていない。もし根拠となる音韻資料が存在していれば、引用されていたことだろう。恐らくは仇兆鰲の時代でも、既に規範化された読み癖だけが読書人の間で定着しており、それを博学で鳴る清代の読書人仇兆鰲も従ったものと思われる。

(3) 叶音の検討

仇兆鰲は、『杜詩詳註』の到る箇所では叶音を多用する。しかしながら、このような仇兆鰲の叶音に対しては、施鴻保『讀杜詩說』に代表される如く、同時代から夙に批判の目が向けられており、現在もなお批判が続いている。いったい仇兆鰲はなぜ叶音を多用するのか、その背景を検討した。

議論の前提として、そもそも杜甫は叶音を用いたのか否か、を検討した。杜甫の時代は叶音の最盛期であるわけだが、しかし本稿では、おそらく杜甫は叶音を用いていなかった、という立場をとる。たとえば杜甫の代表作「祭遠祖当陽君文」にしても、仇兆鰲は叶音を多用して解釈するのであるが、これは有韻の文ではなく、無韻の文であることを本稿は指摘した。このように杜甫は叶音を用いていなかったと考えられるわけだから、仇兆鰲が叶音をそこに応用しようとすること自体が、誤りということが言えよう。

そこで、ならばなぜ仇兆鰲は叶音を多用するのか、その背景を考えた。まずは、仇兆鰲が傾倒していた大儒朱熹の影響である。朱熹こそ叶音を多用する人物であり、それゆえ仇兆鰲に大きな影響を与えて叶音を多用させた、と考えられる。次に、仇兆鰲における音声優先の注釈態度を指摘した。

(4) 方音の検討

音注において、注釈者の出身地の発音の影響が見られるケースが、まま有る。たとえば『文選』における李善、『中原音韻』における周德清、『正字通』における張自烈……等々、作者の出身地域の方音が露呈した箇所を含んでいる。それら方音は、古音の推定という意味では正確なものであり、それゆえ問題を含むわけだが、しかし、方音の把握という意味では、却って当時その地域では如何なる発音がされていたかを知る貴重な資料となっている。仇兆鰲においても例外ではなく、いわゆる雅音とは明らかに異なる発音が記されている。そうした彼の出身地・寧波における当時の発音と思しき方音を検討した。

五 伝本論について

『杜詩詳註』には、抄本・刻本・排印本、以上3種類の伝本が存在する。ところがこれら伝本に関しては、いかにして編纂されたのか、いかにして流通していたのか等々、書誌学的な把握が充分ではない憾みをのこしていた。本稿では、3種類それぞれの伝本に即して、書誌学的な整理をはかった。

(1) 抄本 —— 康熙三十二年抄本をめぐって

『杜詩詳註』の抄本は、上海図書館のみが所蔵する孤本である。本稿では、とりわけ、この抄本が有ることによって、いかなる書誌学上の意義を持つのか、考察した。

実のところ『杜詩詳註』の伝本は、とりわけ刻本に関する書誌学的整理がほとんど未着手のままであり、不明な点が多いのであるが、こうした不明な点を解明する手掛かりとなることが、ほかでもないこの抄本の、最大の功績であることを本稿では指摘した。すなわち刻本が書誌学上の整理が未着手であるゆえ、初刻・補刻・後刷り……といった刻本各種の特定がなされぬままだった。まさにこの段階において、最も原初的な形態をとどめる抄本と、もつとも近い内容である刻本が、初刻であると特定できる。

また本稿では、この孤本たる抄本の旧蔵者、潘氏についてもその家系を明らかにした。

(2) 刻本 —— 刊行順序の整理

刻本に関しては、主だった図書館では康熙三十二年の刊行と記す。しかし康熙三十二年とは刻本ではなく抄本が完成した年であって、刻本の刊行は、それより後の康熙四十二年まで待たねばならない。にもかかわらず『杜詩詳註』刻本の書誌情報を、康熙三十二年と記載する図書館がほとんどであるのが現状である。そこで、前掲の抄本を手掛かりに、初刻本を割り出し、次いで後印本・翻刻本……といった各種刻本を、刊行順に整理した。

さらに本稿では、これら刻本の判別方法も併せて掲載しておいた。『杜詩詳註』刻本は、東アジアを中心として世界各地に点在し、しかも

初刻本・後印本・翻刻本の区分けが殆ど特定されぬまま所蔵されているだけに、多少なりとも貢献を果たせるかと思う。

(3) 排印本——その点校者と編纂背景

現在最も通行する中華書局による『杜詩詳註』排印本は、誰によって点校されたのか明記されていない。本稿では、中華書局の関係各位の協力を得て、点校者の特定を行った。その結果、当時の中華書局編集員による点校であったことをつきとめた。また、数多ある杜甫テキストの中で、中華書局はなぜ仇兆鰲『杜詩詳註』を、排印本に選定したのか、当時の編纂背景についても調査し、これを明らかにすることが出来た。

六 文化論について

(1) 『杜詩詳註』における「論世知人」

さいごに文化論である。そもそも仇兆鰲はなぜ、この『杜詩詳註』を書いたのか、仇兆鰲自身の執筆動機（内的要因）、および時の文化背景（外的要因）も併せて検討した。なぜならば仇兆鰲は、浙江省東部にて文化的活動を営んだ「浙東学派」と呼ばれる文人の一人であったためである。

この浙東学派は黄宗羲を師匠にあおぎ、実証的な学派として知られる。この浙東という地域は、明末清初に最も清朝に抵抗した風土であり、地域文化論という見地から考えても、興味深い問題性を含んでいる。すなわち、浙東という抗清の風土の中で、仇兆鰲が慕う関係者たちは清朝に抵抗し続ける志士たちであった。それに比して仇兆鰲は清朝に仕え、しかも執筆した『杜詩詳註』を皇帝に進呈していた。この一見、風土への背信にも映る一連の行動をいかに解すべきなのか。とりわけ、浙東関係者への思慕が途切れていたならば、仇兆鰲が彼らと

異なる生き方を選んだことも理解しやすいのだが、ところが実際には堅く結びつき、浙東学派内でも仇兆鰲は最も優れた黄宗羲の門下生と目されていた。それだけに、さらなる問題の掘り下げを必要とする。はたして浙東学派の一人として、仇兆鰲は浙東という風土への精神的潔白をいかに保ちつつ、『杜詩詳註』を書き、そして康熙帝へ進呈したのか。

本稿では、右の理由として、『杜詩詳註』序文と進書表に明記された「論世知人」という表現に着目した。「論世知人」とは、もとより経学における重要な説理として名高いが、仇兆鰲においては、黄宗羲ら浙東学派の学統に与する証しとして、「論世知人」が謳われていることを本稿は指摘した。

次いでこの「論世知人」が、出典の孟子においては「尚友」と換言されていることに着目した。すなわち尚友こそは仇兆鰲の自号にほかならず、正にこの意味で「論世知人」とは尚友こと仇兆鰲その人と直結した説理であることを指摘した。その上で、仇兆鰲にとって尚友すなわち尚ぶべき友とは杜甫であり、杜甫を友として尚ぶために『杜詩詳註』を書いたことを論じた。仇兆鰲は『杜詩詳註』を執筆した根本的な理由とは、杜甫という人格的目標に近づこうとしたためであり、そのような人格的完成を目的とする意味において、仇兆鰲は杜甫を友として尚んでいたと思われる。

(2) 仇兆鰲の『孟子』観

本節では、更に観点を広げて、仇兆鰲と孟子を結び附ける必然性について考察した。

おそらく仇兆鰲にとって孟子とは、意念の所在として機能していたのではなからうか。つまり己れの意思を表現するさいの、拠り所であったように見える。己れの自号を孟子の典故「尚友」と定めたのは、その最たる例だと言えよう。『杜詩詳註』の注釈は全てにおいても、第一義的には杜甫のことを説明しているのであるが、それらは仇兆鰲自身に置き換えて語られているようにも思われる。なぜならば仇兆鰲は孟子の「尚友」に依拠することを通じて、杜甫を己れの目指すべき人格的理想として尚んでおり、杜甫を己れに引き寄せて考えているからである。

杜甫のごとき人格的完成を目指そうとする仇兆鰲にとって、その杜甫との共通点を色濃く有する孟子の存在は、己れの意念を預けやすい存在であり、その意味でも必然的な存在であったように思われる。

【結論】

一

『杜詩詳註』とはなにか。この命題のもとに、本研究では「言語論」「伝本論」「文化論」という観点に即して、考察をすすめてきた。

「言語論」において、一万を超える音注について明らかにし、これが該書の特徴であることを結論した。なぜなら、比類なき音注の多さだけで、書名を見ずともこの書が『杜詩詳註』だと了解できるからである。到る字句にまで施された音注は、仇兆鰲が杜甫詩句を丹念に辿った証しであり、一文字一文字を誦習していたことを物語る。それはいわば、杜甫を理解したいという仇兆鰲の熱意が、形となって現われた結果だと位置付けられよう。

「伝本論」においては、三種存在する『杜詩詳註』について明らかにした。『杜詩詳註』の書誌学的な考察は従来ほとんど行われたことがなく、通行性の高い中華書局の排印本が、工具書的に活用されているだけが、現在『杜詩詳註』の置かれた実状ではなからうか。そこで本研究において、三種の伝本、すなわち抄本・刻本・排印本に即し、それぞれ如何に編まれ、如何に流通していたのかを明らかにした。

さらに本研究においては、「圈発」に関して書誌学的調査を行い、その意義を考察した。すなわち調査を通じ、この『杜詩詳註』には六千箇所以上にものぼる圈発が内在していたことを明らかにした。ただし圈発は、抄本と刻本には附けられていたものの、排印本になるさい技術的な問題ゆえか削除されてしまい、その結果、寡聞にして知られぬ存在となってしまうた。

しかしながらこの圈発は、『杜詩詳註』を理解する上で看過できない要素だと言える。なぜなら、他の杜甫テキストは無論のこと、李白や白居易など詩集全般においても、これほどの規模で圈発を含む詩集は皆無と言つてよく、まさに稀有の音注だと見なし得るからである。もとより版本とは、元となるモデルが存在し、その体裁を参考に作られてゆくのが一般的である。ゆえに、例外的に多くの圈発を含む杜甫テキスト——すなわち沈德潜『杜詩偶評』・浦起龍『讀杜心解』・楊倫『杜詩鏡詮』等は、恐らく仇兆鰲『杜詩詳註』の圈発をモデルとしてい

た蓋然性が極めて高い。とりわけ浦起龍・楊倫は『杜詩詳註』の杜撰を批判する立場を採るだけに、その彼らが『杜詩詳註』の体裁に従う意義は、ことさら深いと言えよう。彼ら批判者たちでさえも受け容れるほど、圈発とは、まさに仇兆鰲の面目躍如たる音注であったことが改めて了解される。

そしてこの圈発自体は、おそらく内府本特有の圈発をモデルとしており、ゆえに皇帝の御覧にふさわしくするため添えられている可能性を、本研究では指摘した。そこで続く「文化論」からは、『杜詩詳註』が清朝皇帝に進呈されている意味を考察した。むろん、進呈という行為それ自体は、まったく問題ない。ここで問題にしなければならないのは、仇兆鰲の風土的由来である。仇兆鰲は、明末において最も清に抵抗した風土・浙東鄞県（寧波）に生まれ育っており、しかも師匠黄宗羲・友人萬嗣同らは一貫して清朝に出仕しなかった。はたして浙東学派の一人として仇兆鰲は、浙東という風土への精神的潔白をいかに保ちつつ『杜詩詳註』を書き、そして康熙帝へ進呈したのだろうか。その背景として、孟子に由来する要素を本研究では指摘した。すなわち、孟子の名高い詩論「論世知人」を仇兆鰲は序文にて謳っており、それは「杜甫を知るためには、杜甫が生きた時代を論じなければいけない」という態度表明だと考えられる。そして孟子において、この「論世知人」とは「尚友（尚びて友とす）」という表現に換言されていたのであるが、「尚友」こそは仇兆鰲の自号に他ならないのである。「尚友」こと仇兆鰲は、杜甫を尚びて友としたのであろう。そして『杜詩詳註』執筆を通じて、杜甫のごとき人格の完成をめざしたのであろう。折しも康熙帝より詩文の提出を求められた仇兆鰲は、人格を磨くために書きためていた『杜詩詳註』を進呈した。この人格の完成という意味において、風土への疚しさは多分に無化していたものと思われる。

二

仇兆鰲にとって孟子とは、尚ぶ杜甫に似た尚ぶべき存在であり、そして理念上の拠り所であったと考えられる。因って、孟子の言う「窮まれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」——すなわち独善兼善の思想を、仇兆鰲は杜甫詩句の解釈に当てはめているのだが、恐らくそれは、仇兆鰲かれ自身の考えでもあったのだらう。なぜなら仇兆鰲は、杜甫を友として尚び、杜甫のごとき人格になりたかったからである。つまり仇兆鰲は、杜甫の独善兼善的な生き方に、己れの生き方を重ね合わせてゆくことで、人格の完成してゆく過程を自己確認していたのではなからうか。

したがって仇兆鰲が「志は君を得て民を濟ふに在り」という孟子の典故を通じて杜甫を解釈するのも、仇兆鰲かれ自身の抱負でもあった、と見なすべきだと思われる。つまり第一義的に言って、仇兆鰲は民を救うために君主を求めて、清朝の臣下となろうとしたのだろう。四八歳にして及第するまで、幾たびも落第を繰り返す仇兆鰲に対し、師匠黄宗羲は方向転換を勧めていたのだが、それでも仇兆鰲は仕官の道を貫いた。黄宗羲と仇兆鰲はともに人民を愛する点では共通する。しかし、黄宗羲は己れの弟子が清朝に仕えることを必ずしも勧めない態度であるのに対して、一方、仇兆鰲は天下を善くするため君主を得ようとする態度でいた。仇兆鰲のばあい、君主は否定すべき対象ではなく、「惓惓たる忠愛の誠」に拠るものであり、それは「孟子が齊王に望むと同じこと」を意味していたからである。その「孟子が齊王に望んだ」内容とは、「天下を善くする」ために己れを用いて欲しいという願望であり、それが叶わないのならば去るよりない、という態度であった。そのような態度の類例として本稿では、『孟子』万章篇に「之を諫めて聴かざれば則ち去るのみ」という孟子の表明が見えており、これが仇兆鰲の潜在的意識でもあることを指摘した。

結果として仇兆鰲は、『杜詩詳註』を康熙帝に進呈し、これによって康熙帝の信頼を得る。いわば『杜詩詳註』を康熙帝は聴き入れてくれたと言えよう。しかもこの康熙帝という君主は、「民為邦本、必使家給人足、安生樂業、方可稱太平之治（民は邦の本なり、必ず家給人足（どの家も富んで人々も満足しているさま）たらしめば、生を安んじ業を楽しみ、方に太平の治と称すべし）」と述べるごとく、『康熙政要』冒頭にて「民本」を表明する君主であった。この「民本」を謳う君主を得たことで、仇兆鰲は「則ち去る」ことも無く、そして風土への疚しさも、更に無化し得たと思われるのである。

三

今後の課題を記しておきたい。すなわち、仇兆鰲における「複眼の視座」である。杜甫詩は「詩史」と呼ばれるほど、歴史的描写が多い。そのため杜甫詩を注釈するばあい、その注釈が必然的に歴史考証となりやすくなる。事実、仇兆鰲においても歴史考証に多くの紙幅を割いており、まさに歴史考証を重視する浙東学派の一員ならではの熱意に満ちた記述となつていよう。それは、「天地崩壊」とさえ言われる激変の明末清初に生きた彼らだからこそ、同様に安史の乱で激変した唐代の杜甫から、歴史を学ぼうとした熱意と、大いに関わっているはずである。

激変する歴史に息づく、様々な人間の、様々な事象を、仇兆鰲は博引旁証して分析する。このような様々な視点から人間と事象とを捉えた分だけ、仇兆鰲の「複眼の視座」は、いつそうの広がりや深まりを加えていったのではなからうか。

さらに言えば、そのような「複眼の視座」を有したことが、彼を音注への関心に、よりいつそう向かわせたのではなからうか。音注のほとんどは、破音の注釈である。一つの文字には一つの音だけではなく、様々な音がある。人間や事象の正しい姿を求めようとする仇兆鰲は、それと同様に、音の正しい響きを求めていたように思われるのである。このことは、今後さらなる考察を進めて、その適否を検討してゆきたい。

四

尚友こと仇兆鰲は、論世知人、すなわち杜甫を知るために、杜甫が生きた時代を論じようと努めた。『詳註』というその名に違わぬ詳細な注釈は、仇兆鰲が杜甫を知るために記した、その熱意の反映だと思われる。なぜ杜甫を知りたいのか。それは杜甫のごとき人格を得たいからであろう。

多くの先行注釈が引用されている点は、そうした熱意の一環であろう。仇兆鰲はあらゆる角度から杜甫を照射することで、正しい杜甫像を映し出そうと努めたのだらう。

黄宗羲の弟子らしく、歴史考証が多いのも、杜甫理解を深めんとする熱意の反映に他なるまい。杜甫が生きた唐代の時代検証こそは、「論世知人」の文脈上、必要不可欠の作業であつたからである。

本研究にて特に言及を繰り返してきた音注も、杜甫理解を深めるための注釈以外の何者でもあるまい。杜甫が詠んだ響きに従うことで、彼は己れを杜甫に重ね合わせようとしたのだらう。

五

仇兆鰲は異常とも思えるほどの情熱を以って、繰り返し杜甫を読み、自らの杜甫理解を深化させていった。そうすることで、杜甫の心を甦らせようとしたからである。すでに引用した序文は、そのような願いを表明した一つである。

註杜者必反覆沉潜、求其帰宿所在、又從而句櫛字比之。庶幾得作者苦心於千百年之上。恍然如身歷其世、面接其人。

（杜に註する者は必ず反覆して沉潜し、其の帰宿し在る所を求め、又た従りて、句もて櫛^{なら}べ字もて之を比^{くら}べん。庶^{こひねが}幾はくは作者の苦心を千百年の上に得んと。恍然として身は其の世を歴^{めぐ}り、面は其の人に接するが如し。）

かくして仇兆鰲は、杜甫の心を得るため、換言すれば、杜甫の人格を得るために、『杜詩詳註』を著したのである。『杜詩詳註』とはなにか。浙東という精神的潔癖を重んずる風土に生まれた、仇兆鰲という人物による、杜甫を理解するための注釈書である。

彼の熱意が刻されたこの『杜詩詳註』は、今日杜甫を読むわたしたちにとっても、「杜甫を読む」ということの意義を伝えてくれているように思われる。